

伝統を受け継ぐ“こころ”

校長 三輪 秀文

四中伝統の合唱コンクールが幕を閉じました。合唱コンクール当日の学校は、いろんな“こころ”が錯綜する場でもあります。子どもたちの“こころ”、保護者や地域のみなさんの“こころ”、そして、担任の“こころ”です。

今回のコンクールで、その入り乱れる“こころ”をこんなに感じたことはありません。

まず子どもたちの“こころ”です。今回の合唱コンクールでは、「誇り」と「伝統」ということを強く感じました。3年生の発表に接し、私は涙をこらえることに必死でした。3年生はやはり上級生としての誇りを抱いてステージに臨んでいることが伝わってきました。どのクラスもです。3年生の発表から、保護者の拍手も変わりました。それまでは三点礼のあとに起こっていた拍手でしたが、合唱が終わるやいなやの拍手に変わったのです。保護者の“こころ”が伝わってきました。



クラス合唱を支える伴奏者

それは彼らの3年間の成長への惜しみない喝采と、最上級生であることの誇りの自覚への賞賛ではなかったでしょうか。「感動」という以外のなにものでもありません。

私はこの感動が四中で受け継がれていくことを願わずにはおれませんでした。先輩にあこがれ、“いつかは自分たちも”と思う“こころ”が、1・2年生に生まれて欲しいと願っています。これが「伝統」を守っていくのだと確信しました。そして、学級の誇りをかけて真剣に、精一杯歌おうとする“こころ”こそ、生徒全員に体験して欲しいと願わずにはいられません。自分にこだわって照れくさそうにするのではなく、クラス合唱にとけ込んで一生懸命の姿を表現することこそ、“かっこいい”のだということを学んで欲しかったのです。

コンクール終了後、私のところに駆け寄ってきて「なんでうちのクラスが最優勝賞じゃないん!？」と訴える子どもたちが、どのクラスにもいるのです。どのクラスも、自分のクラスが一番だと思う“こころ”が誇りというものなのかもしれません。これが、私の願う子どもたちの“こころ”なのです。

今回の合唱コンクールでは、わが子のクラスが一番だったと訴える、子どものように純粋な“こころ”の持ち主の保護者もいました。わが子を思う親心が伝わってきます。うれしい体験でした。

そして、最後に教員の“こころ”への思いです。コンクール当日までの道のりは大変な苦労がつきまといえます。当たり前なことなのですが、伝統を守っていくために、あえて強調したいのです。保護者や地域のみなさんに公開しているのはコンクール当日だけですが、実はそのコンクールまでの道のりが教員にとっては大変なのです。寝付けない夜が続くことさえあります。

子どもたちが一つの目標に向かえば向かうほど、勝ちたいと願えば願うほど、^{あつれき}軋轢が生じるのが集団というものです。この時期、いろんなクラスの課題が象徴的に浮き彫りになってくるのです。これに疲れて、どうしようもなく“合唱コンクールなんてなくなれば...”とってしまうこともあります。われわれは、だからこそ、そのネガティブな“ころ”に屈することなく、学校の「伝統」と「誇り」を子どもたちとともに守れる教師でありたいと願うのです。担任としての尊厳をかけて、この時期、合唱コンクールに



、クラスの子どもたちとともに悪戦苦闘しながら、いい学級をつくれる教師でありたいと思うのです。

子どもたちの力と未来に、限りない可能性を信じてやみません。と同時に、梅雨時のむしむしする体育館で、長時間にわたって子どもたちの素晴らしい発表を共有できた保護者や地域のみなさんに感謝申し上げます。今後とも、四中の教育へのご理解とご協力を、ただただ願うばかりです。